

カラッポのおうち

長瀬 やなせ
「カラッポのおうち」
の会 会報

2016年
1月21日(木)
第10号

ことしも「カラッポのおうち」をよろしく

昨年12月13日(日)長瀬やなせ「カラッポのおうち」の会は第三回総会・学習会を開催。富山、福島からおいでになった方をふくめて32人の参加がありました。シンポジウム「福島第一原発事故に奪われたもの — 忘れない、風化させない、孤立させない —」では、会場は静かな熱気にみちて、参加者から「とてもよい内容だった」との感想を多くいただきました。「カラッポの会」は、節目の大きな一歩をのりしたと考えます。ご協力いただいた皆様に、心から感謝申し上げます。

事故着、放射能被害から子どもたちをまもるための保養支援が全国各地で始まりましたが、5年を経て、支援に対する寄付が減るなど、継続することが困難になりつつある団体も出てきています。他方、被災地では「避難指示」解除の政府決定で行政支援が断たれ、先の見えない中で追いつめられています。保養支援の継続の困難さと、被災地での保養に対する「風当たり」が強まる中で、「カラッポのおうちの会」の、小さなおうちでも「年中オープン、親子保養」を基本にした活動は重要性を増し、短期保養の必要性については、もっと認識されていかななくてはならない時期なのではないでしょうか。

スタートから3年で「カラッポのおうち」の運営は安定し、埼玉県、関東の避難者の方々にも次第に知られるようになりました。地元にも根付き、定着しつつあります。これからも、「おとなのできること」をひとつずつ積み重ね、力を尽くし活動していこうと思います。本年も、ご支援、よろしく願いいたします。



「日常」の厳しさ伝わるシンポジウム

第3回総会企画シンポジウムに、福島県から被災者のお二人(志田篤さん、長谷川健一さん)、ジャーナリストのお二人(吉田千亜さん、木野龍逸さん)にお出でいただきました(12月13日午後、会場/With You さいたま)。

冒頭、志田さんからは川内村、長谷川さんからは飯舘村の、被災から現在まで行政、村長の対応や、除染の実態、仮設住宅の高齢化、お金をめぐって浮かび上がる深刻な問題、帰村は可能かなどを巡って肉薄するお話をうかがい、また埼玉在住のジャーナリスト吉田千亜さんからは、放射線から子どもを守りたいと奮闘するお母さんたちと同じ目線で続けてこられた、通学路の測定や自主避難の問題の取材をとおして、被災地の子どもを取り巻くホットスポット、県外に避難している家族の危機的な状況を伺いました。パネルディスカッションでは、



東電や政府の記者会見に欠かさず出席、被災者の立場に立って質問や発言を続けてこられたフリージャーナリスト、木野龍逸さんがコーディネーターとして、除染や帰村の可能性などいくつかの角度から問題を掘り下げるための問いかけをされ、三人それぞれの視点から、原発被災の深刻さ、厳しさ、理不尽さが、更に浮き彫りにされました。



事故から5年、被災現地から離れて「日常」をおくる私たちは、日本中が難民になりかねなかったあの事故を「悪夢」として忘れようとしていました。放射能は五感で感じ取れないだけに「収束」「復興」の言葉をどこか信じ、10万人を超える避難者の皆さんと、膨大な数の黒い袋が積み上げられ、今も漏れだしている放射性物質のことを横にどけてしまっている自分自身を実感しました。原発事故は現在進行中で、おとながしたこと子どもたちは巻き込まれている。放射能被害から子どもたちをまもるために、おとなができることをやろう、と心を新たにしました。

相馬市、郡山市「ほよ～ん相談会」に参加しました

昨年11月7～8日、相馬市、郡山市内で「うけいれ全国協議会」主催の「ほよ～ん相談会」が行われました。カラッポの会は、これで3回目の相談会参加です。相馬市（一日目）では、およそ30家族50人、郡山市（二日目）は93家族190人が相談に見えました。第一日目の相馬市相談会では、福島県内で、生活立て直しの歩みにそれぞれの地域性があることを知りました。相談家族が少なかった分、同じ活動をしている団体の方とたくさんお話ができました。一方、郡山市では去年と同じく「カラッポのおうち」ブースに、たくさんの家族がたちより、説明を聞いていただけました。とくに、ツリークライミングなど自然体験活動に取り組んでいることに関心が集まりました。



今回は、郡山逢瀬町「いのちの水」サンタハウスで一泊させていただきました。坪井さま、平栗さま、猛烈な忙しさのなかで、お世話になりました。二つの会場移動で、福島県がとても広く、大きいことを知りました。行く先々でフレコンバッグが積み上げられたり、道路切り替えが行われていたり、事故が一带に与えている影響の大きさを再び体感しました。勉強になった相談会でした。

ツリークライミング、カヤック体験で保養に魅力づくり



11月3日、12月6日、12月23日、カラッポのおうちから歩いて10分、長瀬玉淀湖河畔森林で「親子自然体験会」が開かれました。主催は「長瀬やなせ・こびすの会」（長瀬矢那瀬河畔の活動組織で構成）。カラッポ会員とその家族が、この体験会に参加しました。

放射線被ばく時間が短ければそれだけダメージが軽減され、体力・免疫力回復につながる…という知見がお母さんたちに注目され「カラッポのおうち」が利用されます。しかし子どもたちは、なぜ他の子がしていない「保養」に出かけなければならないのか、なかなか納得できないのではないのでしょうか。ご両親や家族（とくにお父さん）が喜ぶ姿を励みにしてがんばっているのかもしれない。

カラッポの会では、親子で楽しめる保養プランとして「自然体験会」を利用家族にお勧めすることになりました。この「親子自然体験会」計画をまとめ、秩父市町村行政等で構成する秩父森林林業活性化協議会の支援事業（森の活人）に応募したところ「森をいかす」事業として認められ、資金助成を受けられることになりました。

被災者、避難者、地域に広報チラシを使って30人を目標に募集活動を行い3回にわたって「自然体験会」を実施。初冬の長瀬の森を、木の上から、水面から、ツリークライミングやカヤックによって21人の親子が森林体験。講師インストラクターから長瀬の森、樹木の話、森の仕事の話聞き体感学習しました。



この経験を活かし、ますます地域にも根付く「親子保養の家（おうち）」にしていきたいと思います。

畑が楽しみ！農園体験できそうです



新年次から、就農志望の稲田さんが管理人として常駐しています。自然農や林業の就農講習を受けて、長瀬地域をベースとし専業農家経営を展開していこうと考えている「期待の会員」です。手始めに「カラッポのおうち」でお借りしている耕作地で野菜を育てています。

これまで家主と会員で、コスモスやそばが植えてあった畑や利用されていなかった桑畑が、有機自然農の畑に生まれ変わりつつあります。この春から夏に利用する家族は、野菜作りや収穫の「農園体験」ができそうです。会では、常駐管理棟の生活設備、農作業用スペース整備を急いでいます。開墾・大工仕事等、手を貸してくださる方を募ります。

おコメづくりで被災者支援してます！



横浜に住む家主（杉村）が耕作する田んぼで、この秋のおコメ収穫が終わりました。これに援農協力をしてくれた東京農大の学生さん、NPO 法人 JONA 職員のみなさん、一般社団法人都市生活者の農力向上委員会の皆さんから、カラッポのおうちに「おコメ（約6俵）」が寄贈されました。おコメは、カラッポのおうちに常備米として置かれ、売り上げが「カラッポのおうち」活動に役立てられます。また、郡山仮設住宅のお年寄りにも一部が届けられ、避難支援として食べていただきます。おコメは不耕起自然栽培、無農薬、無化学肥料、天日干し。田植えや収穫には「カラッポのおうち」会員家族の子どもたちや、農大生が来てくれました。

力作を食べてみたい方は、事務局にご一報ください。一味ちがう「食べて復興支援！」。

*恒例になった「福玉便り」発送作業のお手伝い

埼玉県には被災地から避難した方が5000人以上、県外避難としては東京に次いで多く暮らしていらっしゃるということです。被災支援活動についても先進県で、一般社団



法人埼玉県労働者福祉協議会（労福協）など三団体が協働で「福玉便り」という生活情報誌をつくって毎月被災された方々に送付し続けています。

発送には、浪江町の復興支援員さんや、避難しているお母さんたちも来てボランティア参加。被災者交流や情報交換の貴重な場所になっています。カラッポの会でも、この発送作業のお手伝いに参加させていただき、埼玉県の支援活動の様子を教えていただいたり、「カラッポのおうち」の情報を被災者の皆さんに届けさせていただいたりしています。秩父方面にも30世帯の避難者の方がお住まいだと書かれていました。「カラッポのおうち」が埼玉の避難者の方の交流の家になるといいですね。

★ ボランティア参加のお願い ★

カラッポの会事務局はボランティアを希望される会員を募集します。

管理棟施設整備、「おうち」の清掃、草むしり、通常管理の仕事のほか、利用家族自然体験活動のサポートなどがあります。

直接、被災現地に出向いて下さる方、運搬、保養相談活動や「いのちの水」倉庫での積み下ろし、配布など、力を貸して下さる方が必要です。同時に、コメ、乾麺、ペットボトル水など支援物資を寄贈して下さる方、ご連絡ください。

管理人の常駐する場所の改善、そのための建築用材（ベニア、角材など）も必要です。

★ 大人の気持ち

総会シンポジウム、飯館と川内村の仮設に住みながら村のために奮闘していらつしやる二人のパネラーの言葉は原発事故の本質をよく表現して見せてくれました。二つの村の異なった状況下のパネラーと、人の前で話させるには酷なほどの悩み続けているお母さんを代弁してくれた若いジャーナリスト、心優しいコーデイナーター、みんなの交流が生まれたこと、参加者のほとんどが会員だったこと、いろいろあつて活気のあるシンポジウムだったと思う▼終了後、夕食会に福島県在住の会員が参加してくれて、カラッポのおうちの趣旨に共感してくれた理由や、まるで戦場であつた事故後の気持ちを話していただけたこともよかつた。それに集会のいろいろな仕事を会員の有志の皆さんが、手分けして、みんなで作つた学習会だったし……。ずうっと心配で忙しかつたけど本当に充実したうれしい日だったので。富山からの参加者もいました。みなさん、本当にありがとうございます。【Umeboshi】

▼災害にあつたら誰も助けてくれない。政府は国や自治体の存続は守るけど国民の命は守ってくれない。世界のニュースで日本はあの大災害にあつても行儀よく列を作る日本人と言っていたが、現実にはおにぎり一個で取っ組み合いの喧嘩。津波で浮いたお札を拾う為に懐中電灯持って群がる人。警察がいなくなった町には空き巣が▼ガソリンを買う為に並んでいて、順番が来る前に亡くなった。飛行場には東電の家族や早く情報得られた人の列：生々しいお話を伺えているいろいろ考えさせられました。【Aさん】

長瀬やなせ「カラッポのおうち」の会・事務局 ◆連絡電話（FAXも） 045-933-1792（管理人 杉村長世）

◆郵便振込口座 00250-9-136022 カラッポの会 ◆ゆう貯口座 10210-3511241 杉村葉子

◆e-mail karapponouti@gmail.com ◆ホームページ検索は「カラッポのおうち」で検索

※ 管理人への連絡はできるだけメールか郵便（226-0021 横浜市緑区北八朔町1842-4）にてお願いします。

